

Color black

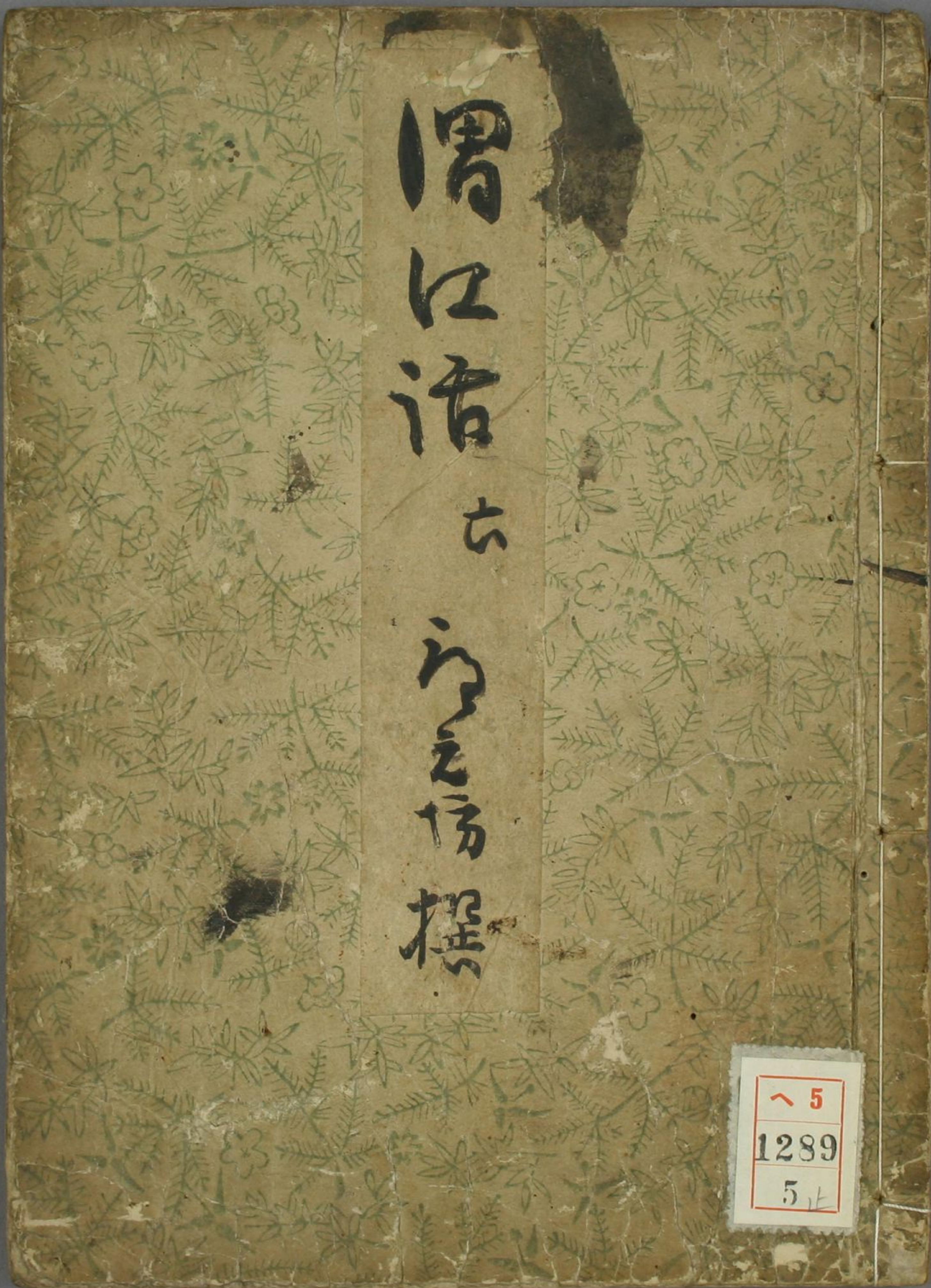
JAPAN

TAMMA

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6

酒話六
かみが撰

1289
15
5





越中之部 一人一唱

魚は

すまやきふと サヨウ、
シテ
えのくわちへかわ や風のる
まくや 魚とれのまき人
ふむけい
ゑか
の入ねねえうふ ゆテ
の入ねねえうふ ゆテ
ね
娘の金や ほまくは ほまくは
杜

名月やねふとましはすて今
若袖
まきしりへ往星ハ坂のねくくふ又に
而生のあらむる月の月のみ化
ま祐とえゆき星ありす社舟 吳蝶
草花や所のあれもじる子供 信
あらきとねるやかまのち 正月
積ハシゴ竹の籠や 三月
解ハヌキ ひなてせらる分うど
滑川 和十
合 三妙

梓ノイトキのあらむけのちと
坂中
のまくはりてあらさくわ
山室
山里やもの等に掃きされ 管五

冒山

絆袖と障ふるまくわい
鳥角
あらきのよゆりくわい やうよ
松
涙繋きやかく厚く被す
素丁
緑と青の配く葉ふすうふ 肘
芦舟

やまくの夜“三番手”

前一回

風がさわがてる。ほほ堂可暖
まのあとで、深繁像葉碎
輪のゆやニスのふらは月己午
えのよどみのまつや良迂哉
草木や冥まとゆくとくを白椎
翁人の間へなづく。佐々木志
圓ちのまことかくや。三番手

偏菊

蓮池よ後所のゆう鶴蛙りま
路中
二月のつがくはるあすひは
其鳥
折れれれれとほやほの月
十丁
葉のひれはるよ怪氣のあいに丁格

高園

のまのむりもあいて雲はうふ
素菊
筋ひくやかくと園の朝日が
紅蘭
新的のうや秋よあわかくかぶせ
土毛

せひりへせしらふよの 堂 作 玉津
婦の福しき事にて田植れ 支川
タホのじやもん うなづけ 雨季
ありよりやひくわほのみ野 右ト
えまくすとーおのるさやかたま 室
あれの例よりとむすほうよ たう
幸ひ堅くそろつてあるじゆく 宮紅
くまづとえまくすりあきわル羽

きれきのまくさくとや石あ ま
せゆ
ほおむうるましかくすて十あい
ね長汀
かえこうてら一男とまくすう 四之
僧正の羽もまくする せむうふ 五苦
烟きくあい風くすり すのち たす
置候のまくすらあて ひゆわ 鷺洗
物くじゆのまくすあてお せ 室
ももれ石すやくする 水うよ 八又

なるのをうかがてえふとおもふに
あさや度へせよ出で大井川 東洋

次又

何とテモとのりうや向又檜 杜亮
虫夷よ寄とかつる 扇のひ而有
烟草もすくすくすくとせ乘む少 離尺
千尋 て扇の下と活字の種うよ 千尋
様もよやあらぬひのえあらん 老感

四二九

野刀

日本道中
湘南

改めあやしむ物のくまに
岳永の仰し入るや まのと
瑞つまの種や せ因とむちれ 万化
移宿しほれのあめくら ほくにん 主誰
きのの隠くらむるほく いわ 佳御
かきれへまくらる えまくら 玄翁
豊ふよ富康こうくわ ゆくれ 御付 爰人
飛とてそばや拂のうと 咲 甲し

日不連中

繁衍やまふるのまかう十程 刺

里乃

るをとてまく鷹るほせり 里桂

跡のくわくもくはくもく 鳴曰

のよれ縁もくうくいもくと 蟻若

あきよれうくはくはくはくの月 十里

は仙事やぬるにほくまの市長 疾行

せきのと勤はしゆく田植ふ 未周

むくよのとく御ねひくわくわく 等本

内不連中
未周

あはや野のまくはく はく 居北

らふすの申まくねるやまくの は

佳朴

くわくやあくの不の歎てり 巴流

蓮のまくはくや はく お はく 次章

門柱の傳まくはく はく 和琴

かくねてくよからくさく はく 球石

名月やまくはく はく 旗ひき 旗亭

名の戸とおきてまく 田植計 田植計

雨石

利ての後はやうとされ

石動

笠の鶴は天祥居れやむか
方里のそりは所すまきもん周
三味猿の猿はるちむくそ
錦鷄やさかに雲れ向け先風吹
柳枝もさかあめく小點約耳摘
まみれや鳥をまへ起て沙壠汀

あぐし筆あくわや雛の酒
深きの湯をへひくともまく
まくのまくやまのからくに可由
又魚をしゆけま幕のを　晴
あらにれ首アセアシガ子度水
わねやうくとくとくとぬるのみ　雪江
幸くやな名もまくはね入里　若達中
松緑　首代のまよゆけ　御うよ　己首

五ふかうくまはまやかのる菊里方
ハ朝の風うらまく門田川宿御
様（様）おととひ御やいづれ至由
ふくみくにしきくやサセア姫邑
ちくふのねしまれや五月テ孤星
きのき掃てふらう御川幸せ
餘（餘）やまてくかく置（置）其（其）
うひれまやまてぬく等（等）把（把）

あうちけしやくやうくの音
すむしよはきとよとくゆう御土
牛の鳴うたとくやれのひと義山
坐（坐）すく坐（坐）れ蛙（蛙）よ杜客
うそくせんかくじれ御外品仙
うの名とほかくすやまのじ日不庭中
うの木やあれまく森の上仰之

やのうとふくはやかふ
ほくふくみかわやかふ
ああいだやたりのあれどた言

様稿

れのまつはるかな吹 柳 ま
氣のすよをかしむられ柳吹 雨吹
りそくしまくのそく吹 そく吹 呂吹
蒸しもじく新のうかれ は 甫融

詩もとてゆけねや 紙の文竹
さやが森のゆの解うろ宣え
うけねふとあく ふくら 句中
ぬやうけてすなの一文字急眩
玉の名もくすゆよそくは其處
葉のひやまの尼とせうと 射柳

井波

移くわれかくさやせ サセタ 路健

お事やあらうれりと床のやえす
文月の文せまかわくうす月共者
湯よろとゆくとあくとおの松治水
とくとくゆるもあくとおの月林紅
り木や柏の木とし井戸を放宵雨
望れあや扇の葉よ巻きつゝ其仰
敷障あや後の竹とく至仙
木ゆくめ草と砾あらすむかの望

葉の葉もやまの月
葉の葉もやまの月
さあ吹きのりとく月
衣張の葉もゆくとく柏
出代もゆく壷けくわゆく有菊
ぬ年の葉にほりとく丘をす
七経や糸とまれのうはす
ひくとくとくとくや落の葉
みのるるるるるるるるるるるるる

行きてるやまとやまのち 二善
苗代や信よひを 唐子を 箱 雨國
元猫のよて駆れりや白牡丹 こす
アホの血ふくらむ 後の月 を星
キコモチムヒヤ やうすの月 元ぐ
薪人

被疊之部 七尾

移動へくへまく からう月 司麿
花とよし望のせいや幕の月 え味

ふゆへ鳥も歌く 橋本 仁和前
橋雪て白いはれあつて立きの月 有己
花とよし望ねまくわらう 仁和前
猪もう鳴れと葉のひで 仁和前
仲ともおと合ひや百合のひで 史員
もまの中よけわくや葉は青 宜山
かくはくた遠きもとや花山堂 吴文
るのうとほのうとある苗代 ル陳

猪口にうる角口ウツノコロとてゐる
萩のゑれほりもとふ田舎者全車
福まや姫れに北のまくら
ゆかや山ヤマのれよ森て書れ
ゆのまヤマ新あし不ニの猪口ウツノコロ止
猪口ウツノコロはすよてふやまのすよ 陳三
五士の喧カミようちやを詠 花園之
虫テと詠よくるやひよ 七言

鳥の猪口ウツノコロ花もまくら地の蓮 百童
花よやといあわいとひ丘丘する 鳥目
けくに猪口ウツノコロ信ありゆくニ ま
山をくわむ數スズよつやくの月 美北
猪口ウツノコロあしは葉りを仰 ふ 番否
も仰やけ下墜シタツイの音もそれ ひづ
老の日は時計トキメキアサハ行をとふ
猪の木に暮ムカシル所ひづく音 有

旅宿食も亦少て牛と豚の味
りや家とまちる泰の門 自松
をくじらやとまの極い 湖月
各月やアのまゆく人のあ 芦由
きもくまどもとくされて月に 林童
草木や先う葉の逝け 吹九
白雲の絶じくすれも因 鶴田 懇懃
ふかくゆると化粧よやまと待 狂言

旅館行かう一里月夜 玄中
きんじんじんじん宿の宿すうふ
碎きの葉もすれへきはくは
葉のむれぬけえしやまくはく 名古 みゆ
石月やあひかよされ葉の葉 松露
白梅とゆ一ねぐらを飛くふ 七夕
り葉の告げまわく知のゆ 星暁
まとやまよ御 蒙古 牛 李白

鶴の音を聞かずありまつる 月夜の邑子

加賀部 津情

わくよ以仰もちや 仏の家枝説
田のうきよさめや下や 郡の素白
白はまゆいのく清くや 因松堂漏月
清くとさめにまくはひ繁麦取
清くとやせし肌や まゆのや 枝凡
えふとやまゆはひわがス引 小少
引一凡

能松よりゆきうてうるすのち
ゆゑよみにあらむなうりこく 松眼
能松よりやままれられし仏の名 里机
金波

能松よりゆきうてうるすのち
能松よりやままれられし仏の名 里机
金波

稀う音や まへひうれはせむ
附海

附田よりの音も 蛙 ウヌ

凡曲

メ川

離かひくよきひづり 桃のむ 山敲
木音のくらへらはーじかれい 山丈
唐エにれとしく月やササめの花 非亮
菊ねもあよしよよう 桃の花 鴉
きさくへん やしのと 菊奈

きききと月よりやあく梅のむ こゑ
あ捨て神しらべの梅れむ 忽 忽流
あさのきれはく柳、よ 文志
柳のよ底とかれや 沖和 佳云
まちあくまくひよし 柳外 猪内
匂柳よ始の主ある 柳川 功宗
家柳よくいもあく 柳うふ
ゆう「る濃酒の思とまのこころ

まのまにまくまく うるうる
うるふゆやがては連の流す
まもと呼むるうり一三五
まやよへる飛もまさん
うひのねのね^{トカ} やうりの
鞠もて月とまくまく 楽^{ハ子}
まほのねとあらまくまく 右
小松

みやよやうやうくに す 宇
みのれのまもまく す るい
ばせのまもまく す るい
新のまもまく す るい 羽虫
まゆよ す まく す るい 改
ひくよ す まく す るい 蛙
ひくよ す まく す るい 之仲
まゆよ す まく す るい 仲
まゆよ す まく す るい 之仲
まゆよ す まく す るい 乃翁
まゆよ す まく す るい 望

さうのひれ中うしの鳥うな トホ

鶴ひへ奴てあれ みる ト 和井

まきりと祐ゆきと出の日和け ノ弓

大聖

獨かくはまん入かく 祐ゆきよ 玉脛

世伝のひはくもつゝて宿ふか 輪駁

ふくゆくまちて祐あくゆ た 保水

白ふく祐うきをほく まきの ひ 虎角

経度のまきの裏うく まく森
波峰
いよりぬやむかに役うるこう 而五
ちれ若れぬくと喫やまく ひ
峰うるまく ひあくまく ひ
念仙のあらすまくと かくと ひ
むねへしは移かわせき ひ
え、體のうき名うきやうやう衣
あこぎの匂うきをうき 漢川
虹吟

まの本起あれども おも雀
の宿のまへはれい社母 うち
涌よく 熊もあと 駒を下
船するのま魂やふんて 郡山
宿ねるまうのまされば 桂枝
山の駒をさる ほふ 巴立
まの宿れ伊勢 おの ま
ああやちく早めぬよ 吸里を

みえし角のまくまく
ま細のまくまくひまくまく
タきやほと駒わく日かく
川ちや細くまわく日れれ
まゆも富士のゆゑやすあるま
入相のひゆかれれくまくよ
まくかれてまくまくあれあれい
まくのゆゑりくやあする 里を

元山や匂はるか木と草のや
白緑の常闇やまの天の川 草泥
タミや相生れねし片かもい 枝交
川りくに起て初きり乍らの木 五柳
アシやひよむきれ一かどみ 茅巣
鶴りくよやうはの木搗のゆく味 玄衣
望えりぬるとくして柳の象菊
のうふりし草木と柳の葉 雜文

雜文

糸碎り
繻ひるひやれてふるい
すまやあく教の育とほ
編りの木とぞ
羊角 保帆
猫の木とほの世話やくわち
糸細くぬあらそよを雀川 巴水
わに和朝のりくにねふ 白鷺
す竹やさくら木とほの木
蘆のひや糸絆はれの木の跡 政局

政局

虫の多く砧もさりや早に ま 何由
名すとふよ捨てぬ 九月 直 あま
うきやはるもゆあゆり は 吹
け半身内ひせよ や砧 け 竹墨
猿ハヤヤまでや達の山と出す 四芝

越前之部

福井

五葉うちれ拂ふをの耻かへ 六松
夕と蝶よくとて百合のむくび 桂前

錦ましゆかすの葉の極まゆ
新泉
れをれわや遙しる不革
小姑の文をよらくや机の花
琴の丸かげりく葉や日を敷
もくと蝶すのむしりも
学案の意と記くや望みう
ちのあいゆづくの香ひ 可永
ひくと葉をそよぐねの上 絵者

日不連中
紅帆

とふよ見てゐるもや大根 引 芦笛
あきくまとありよりもやじを 松文
みこやさとくわなと うかひに 国中
ものうち後へほきく うす月 圓指
佑保姫のかずかくら い川 御 えま
きおやりまくら 田 まくら 韶
すまゝむね伸すす田面の日 宇柏
菜のいのね、蝶のとまなづ 可推

梅はやきのうれ 湯れ 町 其之
七八のこまゆや ひかゞも 見る
すまとほよそのまゆや菊のい 志
ひゆきのひのかくねや菊自慢 山桜
おひりや席もくまよ 破そろ 和音
ふぢや花をむのとくられ 和角
ちの名とひかくすやお牡丹 望月
きのよもひひかづやるよ山 荷音

夕暮の邊の水を飲むやうやく
蟬しやかまくや秋のあ月に
みしゆてみの雪鳥や菊かなね
蟬の名もえひにありとあるのれ
ぬ引や極く仰にあひそへえか
きの世話よあひよ、禮て九月尽
るは
白菴子ややうせよちゐねは丘をす
四月
きれいもせやさすものりあそひ
ねぐらすれどもくまくや松のむ
タれや細おゆふをしきる
ひくまちる入江やまきのアケル
わきや葉にあくまくる葉の山
すの草とて玉肌のふらく
志水
峯まにかづくとくとやまのね
あわ
うきや月とまとのほ不常
醉き

アミや活字で書れぬのひモア
スル本の化粧いじくめじ寫りて久
キまのむや草のじーと壁の表時水
流佛や、行きてちの毛はせた若和
きさくらせしれどやキのと著差
れりじほや、序一玉え木立如翁
ぼくとあらすとくわくわく立え
白首や、アリと静もうのアリ一葉

経の文れあれもしりやうと麻葉川
ちれのじや曲輪のまゝ中うな
黒田の入へも、ゆきや菊川
ふきねりく、黒木や父のまゝ井水
えへよれとくやねよ若ひと志
三月のよかくれもうとねせり揚竿
きの日もあらぐと希やつさく
やわいよかくと春やおまえ
仰志

松の根のむきよかくしれもや 松芭
文臺にてぬるはせとや わかとこ 中双
孫子の一かきくらべ 大坂うあ 榎井
石橋やるふの脚とめほり 不幸方
人じやくすらうとうあり 風中 通
きくま世のまへ遠む 鮎とふ 芝岩
あらゆきまどひもや 乃からい 張市
石橋やくわづみのまわら え 川底

草木山極と家房よもや まか
かのとおつてのえぬとすく おのひ 蓬入
けれのらぬとまく ふまの極 迷山
まもとゆくぬじよをひ 一弓 水可菽
經年とこけれああ ああ あ あ あ あ
いのりもよそほくわくほく ほく か み流
轍のまぐれいたまくさ 口あく お 富浦
田くわくうやひのまくら 一 和合

はテの名一筋にゆやうる月 柳葉
りまも庭さかわのもの活里夕
をすむのきわどくはくとくわ
川まのくとやねにあひ おアホ
きぬのむやうのかれ おアホ 俗不流
タニのうへほくひゆうふ 俗不流
文部にむのうふふ 俗柳
ちよホトのまみくひを 繁男 俗柳
少百会

まとうやかひよ淨かへ 修う葉
あうまと春によくい夕日 修
徳つゆくとくやのまのけ 修 今
そのりや修ゆきやるよ 今
よりに草くとくゆくひのは 自由
青雲のあゆも降る 未種
清その月はうりをも車 在
やうのけよそりやまの歸 不知

三国

あはやなまくもれわるよ以輕雨
至れに後とさへやるま前以費
らすよよよよよよよよよよよよよよ
ゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ
苗代や草代 組のうのうて陸上
まやややややややややややややや
鷺 鷺 鴉 鴉 鴉 鴉 鴉 鴉

草代や一第代のうろた
まきまき代のうよやるのれと計較
五代のうちくの金や大ねり 一統
ねじりや机やまくよ新の内作か
まかうの草代入るや 郭云拾雅
まぐれひよ飽てやり 壱素述
かひほや冒ほひの難ひよひ暮海
わちやらのぬれのう化旅 己伯

えりやと移しゆよ月あら
牛ぐるもさくらや苞に笠森 止角
きあやけ波の牛めれこれ
るのりやつとすよし翁よ佐季和
筆にもうひそめり十日外 眼囊

卷中

ふうのましとよもよまれま 市往
籠やそむけよもよふ公私 里泉

りねのちくわづてすくふい
ち張のすくまづか 丁せぢ
まのはとわくや 固えり
ふうて判れゆの化粧やさのい
この行し鞠あとこみの月
苗やよかげくちのひやねに蓮籠
牛ろにゆるるや 阿のねと
まゐのくふよほくを森に 猪羣

晴の草木をうれや 番の い 吴笠
森てうる夜雨かくしれのふ 完枝
ひハ桜の聲生一てふま 月不連中
蜀黍や拂よにいの源 因士
行まとほくすをも音寝外 横吉
破の聲のくくらむをあひを 要於
つるや日し十のくく 衣 羽足
缺絆よきあ名あひてゆふか え
山え

れゆれれれよまのゆくわ おル瞳
床も角わへてふも波音川 羽衣
山音ややねかくとゆくわ 五菊
学のよかんにふくや 衣 かへ錦市
種くわあぬうよ紙の矢あれ 紫曉
きのよかくとゆふせせれ 紅帆
直ちよて秋のあよみやせのよす 御鼓
ゑよてをひる黒一えむる 玉盆

苗代よりあとをうかうかとす
ち城の門れ除そく まむすりよ 航船
ね駆て牛も含ふの石をとふ ト犯
津りその手の そくわんにむかひ
御覽

教賀

やのひに書のいもかや ろ 鳥 粟呂
せまのじやひみの脇、鳥 中 可伸
春あれやの音あり 拝 うよ 大布

タれやひきて まも鳥 や

花燭

苗士の絵れ草にまゆるをきか
稿つぬやさすのれどもとまえ 南里
和くふひれらうや ふりう月 八川
えを憲とあつて笑や そく 桂 佳木
草物や生延へ葉のあんか つ 佛周
桂枝とまくはじや枝 一柳 右柳
みゆや給にちよらの 伴 佐 右柳

はゆの碑よやくひや 烈のけひ 欲求
白紙よ白書しおり 離れおれ たれ
わのそひ稀てちゆうる 五事外 五江
名月やおしゆへらむか 篠のま 法家
川船や帆よ吹きゆる 絶の夢 山高
七浦の時もや 曰て 加之 山内障
虎竹よかく 丹のま津川 姜文
まもやシ海よかく おとぎ山 里
市邑

詔書れ筆によく やむく 三 忽年
あくせややくく 何を るる 丁 枝市
手の葉もかざれども まみ 犬 ^サ自羽
作鐵つもく 宮にまく白い 東方
墨をみて ほうひく 邦云 釜舟

孟子之部 高山

糸の一本くじけ 防 うふ 午有
え角とすや錆馬のむこき 舟

ソノホト踏ニシテアヤシムを 久由
モクシテキモトニシテアヤシムを 夕雅
シモヤタリ流シテ 芳田の 桃 斗作
木枯や 神御松に もとほモモ 箕吹
モコモリ人を 逃シテ はなわ山 信列松田
義濃部 山縣 甚得

あまや毛の背中此物是へ 右範
おちよ無事にまー雪うめ景 東羽

出立れ音や 錠とせひ けれ 雪儿
周とあむに きりわからず 三月 不音
きてくよ おまかえす あらわ離 分斗
皇の時 あくとあ夜の あくとあ 口考
斧子の名とみて そし そし 人 ま 故酒
天ぐい片より 針や まくら たゞ えと 坂離や あくゆきとるよもえ 木相
寝もくれて 相のまにすく夜あ 云芝

もと

舞久の夜あく 僕て ふまよ 船 有登
あれへ うむそても あむひきのと 月杯
旅館にて 駆りうるれ 百合のと 湖舟
不く あらや まみのふさく 仲志
まし菊や るの名むかえをくわ 可
はへにふれと まや らふま ひづれ

故車

僧

スモウヅルシテ あり 魚 離 故船
ハムクル人せ 徒乗れ 故船レハ 李莉
モムクル也 独處レミテ え衣 芳麻
おひ日とはわくも 育うるあやうハ 早禹
移くも鷺もと と と 指て おほく わ 口詰
蓮のまや まのむく おゆ行こ 机官
まかしれ名ふ鳥もくも まき 蔦 体を
異井

鶴の片くすゑと
あまきあつて赤れあれど
深きれしをへるを
童子

加納

まかへよみとせひよれども
ま積や粘のまくわ
まくわまくわ
列説

西行

えられて島にあれば雀の
鳴きにあはれぬよか
水

三

思ふ食の種すて脇のタヌキを流
藻のむれくわらうけに寝る芦什
里のえりにわらうけに机史
まむれりにわらうけに馬川
巴東 雨

左近にさきが面や 麻ひ 汤起鳥
管のよれ さき起わる
いふふけ まくわあた松の扇 仙蛭
壁てこむ まくわあた松の扇 仙蛭
ひもせじ まくわあた松の扇 仙蛭
雉のまくわあた松の扇 仙蛭
せりふくまくわあた松の扇 仙蛭
連ま

竹鼻

幸くこの天宮の元れひよりよ
やがふにまくわあた松の扇 仙蛭
こく身やうのまくわあた松の扇 仙蛭
大名の供、おふて まくわ
りよやうのまくわあた松の扇 仙蛭
子の扇よてわざとくわあた松の扇 仙蛭

大抵

かくとんとくわあた松の扇 仙蛭

ええ すゑ

吹拂よりて松竹さゝき
おのづか耶な室や松原け降れ
此處もとまつての御ふる島
深見てほの月くるあくをいふす
あらみの松よさくは針うふ丁松
孤雲やまむにふの色うふ一丈仙
詠歌くわくを廻て床も月也下
日もと菊草もと虎のらゆふす素由

あてればふくや林のひと
また名う生れるるすと落りい
言ふやあもすとじひおおたけ
任尾

り林に傍りよまふよひ書と立
桜波
桜子のよし庵とあざふ四角い
まやかまくらしもあまれ日肩心
れよせんよちづけをみひ
花暁

ゆねうねて荷しやふりをよ 桃蹊
若年よもや馬のあくび 来風
娘娘禮やうそて ま 衣 来ね
竹のわくもうそく るのき 一脊
おれとむれやうるの 化孫 う え作
改めにゆるて おれ うらわ サ

すれいはや おのれ 本調

聞

星人のまゆ や ほそ す 千擇
よ 稲の傳ひよみの まゆ まよ 雨跡
蛙よの九回のまゆ や 水かく え 榆方

大矢田

まのまことかくと お宿や ひの す 松暮
一木かく あい まくと さくと す 竹葉
梅物公へ じよ まくわ ほほ え 榆方
やねのまことかくの 宝葉 か 萬葉

第三山

猿の鳴る處に立たず
端水
行水の水元に立たず
鷺鷺
川の鳥は鳴く
ナニシテシテ
初の音れどもひづきを立てる
林之
風石ややくも鷺の音一音
古拂
の音を補引するやうるま
白石

ぬけて引の音をやうの
裏門の音へまづ
鶯々 花
も御に日とまづれある胡蝶
名目や常にちづれらあれと
あまた力をもつてうなぎ市
玉芝

山嶽

青松や高木の陰れおわれく
白川
空へ新うかるてや
錦 玉
百也

ふ苗えれむにわくの 虫 うな 許隣

律院と新妻のあそびをまつた
相のまへもひらりて わ まきぬ 田宇

あくの里にさへまよ 佐 まよ 因茲

う田さへけテや 離の里す 田 こ寂

ねのりとむよしふしく 仰 まよ 兼幸

やわらひてうや たかの放ち 犬 吉柳

白菊のまなもよみ 狂ひま 吉女

ほ まほてあひくや ほの月 膺雲

涙聲絃や さも名ふれまめむ 国推

タ和の仰 まよ 月 和 まよ 保次

実テや 箔の書 箔の管 ひづ 月吉 仙毫

あくわて あひくまよ 月吉 保次

う絆よ 仰走のまよ まよ 月吉 保次

まよのあくわて みや まよ 月吉 保次

中津川

音節のえりとそくくう跡 例 緊切

草種の様 えりとや えかくよ 章甫

跡跡の毛毛とくわもや 物の火 倭に

葉のひやれて毛毛のふ敷 法 共遊

葉葉はげく出むれればくち 例 十八

ひ葉の夕日をもじや 七日 テ 五光

入あむちむれもじや 五日 ひ 桐二

岩邑

剪拂ふれんきり 擬陰子 推已
言ふれふやまてやふ あくいふ 固互
もとゆきをもと あくいふ 例 三調
納豆れんとうの起せかおする 水垢
きびや あくいふ あくいふ 草のれ 鞠集
物集れほして あくいふ あくいふ たし
ま薺の あくいふ あくいふ ふ 枝之
ねうちに あくいふ あくいふ 中 巴洲

流ぬやととのはちくれ
支那
みこややきみて 脱れるをめど
支那
あくともむかのあや 滅世
乙未
弁當にうちむじむれ 佐藤
秀次
シテハシタカヒロ
布
巴馬
極みゆきの日和やふもと
高
杜若
あくまうれひんむれ 佐藤
秀次
妹のまわせあむと うやうやく
乙葉

アラムハヤハセモハ
ホリヒトアメ
ミハシヒトシテリヤ田原石
秃筆
カニヤ落の充食もかそ
流水
あくらひて歎と体うるす落
川御
しきもつてるともあれや 末御
水語
タ目や陸
ものあくらひと おな物瓶
布新
松机
松机

種もくふれきてあかまうの宿 は思
はるかてす猫のねふ緑毛 ま 和羽
あう毛やうむれせうと け 蓬毛

古故郡

うとうとあてふせり むやく ね軒
よのあとゆきうち そり廢の よ 泊水

久里

も柳の枝を おとこす月 伯夜

まみれやむくゆとりかね後の 墓 東井
はうの名ひやうてや ら 岩 笹庵
名月や月がさき作の 月 亂 大弓
一寸あやうてや ねの月 里泉
麻糸にふかみを いはき まき
首のまくらを いはき 故 け 香袋
あやや井折と いはき 月 気 海直

那上

をかひの人とちりす すま うふ 混水
蓑衣や縫衣あらわせ 保持板 かみ
あくまでそく 犬や まいかに 脱魚
まかまかの あらわせ あらわせ 朝 有隣
まかまかの あらわせ あらわせ 朝 長え
まかまかの あらわせ あらわせ 朝 文等
あらわせ あらわせ あらわせ 朝 連 等
り秋の あらわせ あらわせ あらわせ のも 野雲

小え

めはるあてこゑきてあらま あ
あらまのあらまをあらまをあらまを 退
うの車やあらまで 郡 云 たぬ
鶴 あらまことし 片 手 戸 背写
筆と手とあらまをあらまを えれ
あらまのあらまをあらまを おひこ あらま
あらまをあらまをあらまを ねう あらま あらま

松きの事ひのすと駒て かき い
ゆきのそと御本一 淩音 お 素董
ふやもほほきもて けり 扱 え
まちも縫や くわへて かく せ 扇圓
まちのくわへや 菊化粧 好以
梳れんや あやとの香 まき供 里中
ねのまくらくわへや もーくれ 放逐
一 かく せ 菊ふや うすれ 菊 みゆ

ねのむくわへや 蓮つ タモく こ
草や ほもくわへや もれ もれ 上 皋く
るのむや ほもくわへや まほ 容 紀算
神経や おもくわへて 夕月夜 月相

諸國文通

肥ふを寄
至様や まく ひ嘗て それ うか
絆字て じく ちく まく まく まく
其扇

牛碑

村主と源ににまの妹者 うふ 鶴角

あくのまきのむかわゆる ゆ 加ま 全 楠原

あくのまの鶴や離れ肉稀 宮全 猛毛

見事とよんであるまく ゆテ全 いふ

脚やのな夜の加や うふ 全 和歌

竹の木や下風の木 うふ 全 和歌

山里の木下風の木 うふ 全 舟

各月やサガリ 人よおあまく 全 邦事

舟門下風

松醉

うれしよりて早めわかれ うふ

古高高

床仰ハアうれしそう失せ うふ 全 古度

名月とうれしにあや失せ うふ 全 百曲

失ふ失ふせすや ふゆ うふ 全 百川

全 百葉

るよの龍や柳れ馬ゆとり うふ 全 一の草

様拂や草り草り柳り柳り柳の福 うふ 全 一の草

臘月の暁し草り草り草り うふ 全 百曲

白猿とねのうらやむやむやむ うふ 全 百曲

化粧なし後赤の風アシカ エ

勢志鶴山
曲浦

翁翁や十月の場アシカ トモウ

住勢山田
た雀

木之の元アシカ トモウ

東武
仙活

はまく至るふる事アシカ トモウ

飄動

持てやれ筆アシカ トモウ

奥州前
把

候遠アシカ トモウの事アシカ トモウ

佐波川
美涼

翁やまやまもむのかアシカ トモウ

佐波川
把

う行アシカ トモウの事アシカ トモウ

全
祐丈

よしのひとアシカ トモウ

石井源田
柔明

まごとアシカ トモウ

全
柔音

声も里ても強や 那れ む

禽澤
當春

菊のあらわきの白飼や詠ひよ

全
加水

水澗てまくに周あり えま 立

全
孤山

涅槃室やりよくゆれ厂もあり

全
一セ津
二月坊

山國のりくひすなうれいよ

全
浩笑

風やまくしりく 吹 あそ

全
午松

妹くのらばあねま日和み

全
項桶

ふさいぬるな作の音錠

全
千夜



毛ひづねしらかや おほの お 全

丈蒸

ねえにぐくひこのゆ て お 全

緝柳

きくちねやあけのゆのゆうと

出立
潭

ゑれくじくもるこゆやゆうと

全
紫文

あうきやひまく 月れゆく いは

全
秋天

渭江詒卷七

洛東遠鑑塔序

并供養

そしと竹燈塔は先仰生るよ故園義濃ノ國
山縣郡英山祥刹の西に國に造をせり
えどりも序へも市の奇縉本とぞとへ
祠堂と文星觀と號名ヲシテと稱名と稱云佛と
之銘の序文よりもぞとれ ふ

山陰の邊を廻しや亘入らずと圓すて
西より北の諸名と駿河背は年と月と
山陰の邊を廻しや亘入らずと圓すて
此とあまの山にて中山道の驛路
を走る所と云ふと申すが如く
遼國の邊を廻しや亘入らずと圓すて
我が山陰一滑川の双林寺
を下りて回ると山陰の邊を廻しや亘入

山陰の邊を廻しや亘入らずと圓すて
頻々山邊塔と達さざるを幸く
諸國の邊を廻しや亘入らずと圓すて
山陰の邊を廻しや亘入らずと圓すて
その神靈や山陰の邊を廻しや亘入
らしく他国の門をとどめず
かと山陰の邊を廻しや亘入らずと圓すて
之神と山陰の邊を廻しや亘入らずと圓すて

行トハシムトシキシタニアリテ
彼シハシムハ裏寂ムニシキトシムリテ
シカシ祭神の終事と如月の廿日ナリ
遺言シテ御前ニ名ミル月十日と
保持ミリテ五歳丁度アリシルマニ
ニ宣おのに席トシムハ列祖三十餘聖
モニシテお七二十余聖トセシ
滿ノ御内院ニシテ大旨と板経一
一

およ誦經の事シトシタニハ禮請
供奉ノ事シテ御内院ニシテ御内院の往
來シテ御内院の事シテ有リ一
輕シテ御内院の事シテ御内院の事
在庭ニ候トモクルヘシハ育ヒ
レハ内院御内院御内院の事
御内院御内院御内院の事
月日ハシムハ裏寂ムニシキトシムリテ

塔西行稀空新あらうるる總音事ふ詠一
ふく經語のりづと石せん修すれ

物を

伝卷

きとどよりすれぞ

月のかくし様

かえ坊

音在

列度三十緒事

洛陽

鹿泉

花の雪羽は林や 伝卷の日
もの跡じにはひのひづく 様 全社音
ひととほれまじきや 水の經語 全仙行
花よゑく 東梅宿の佛 より 全山只

詞ち畧

幕よゑて 隆あり 花の唐 宰陀

ちかくむのゆきそよぐ白雲

大津
ま名
指三

尾名吉屋

夏旭

人望よす白やむの
歌
全 菊衣

うきと御よじるや墨の水
全 菊衣

あいやまくひのれあゆみ
全 放之

あひてうきよみれ 佚名
全 章吹

思さふや私よみくらべ 佚名
全 宇狗

わいふくもみく 佚名
全 猛松

石肌も抑よそひ
歌
全 儒

四服の所せ新作
月
野紅

朝霞新作
日生平崎
之由

錦のまくら全弓雄山 佚名
全 許文

山もよしにしもよしも やかく
内玉も
志乃

とに城よおやかく わまく
東濃喜符
三調

あく掃く抑ほくの 但
月仰歎
白川

ふうや蓮の在ぬと
歌
日乗山
喜夕

月もとす宿よはく よく
歌
日闇
知六

むきだましき月を
歌
日辰昇
喜慶

石よくなむ歌
歌
全 敦承

義濃小方

心の内を悟りてひた徑様

望むた

心の内を悟りて佛も搞業好

全佳立

心の内を悟りて佛も搞業好

全立芭

心の内を悟りて佛も搞業好

月夜芭

心の内を悟りて佛も搞業好

全東幸

心の内を悟りて佛も搞業好

丁杜

心の内を悟りて佛も搞業好

全素由

心の内を悟りて佛も搞業好

全降五

心の内を悟りて佛も搞業好

書林

稿活

心の内を悟りて佛も搞業好

心の内を悟りて佛も搞業好

心の内を悟りて佛も搞業好

何庵亭

童平

七回追憶

いやも享保の貞観よりあつて
春がむらかしの嘆を取る寒まで
後七年の間一々て正月一歳の世と
今や諸國の仙道もまたその有無とあつて
あるねに兼深の様なまじめんとまほの
新とあくまづくわむすけの御事と
ふくふくの運二十九のまほせきと

よろしくはこの仙道の証跡と
さうして只せひとと

供々林寺禪翁

をとふりて立起年月日と

正當八月十六日

わんや何よへおれはじめの在

濃北主

茅山人玉沾

京寺町桙小路青林
橋屋治兵衛枝

桐月水二日調之

久松之子

